広報さとる

発行日：2025年1月28日（NO.040）発行所：トヨタ自動車労働組合
発行人：近藤大輔　編集人：井出悟　印刷所：（株）トヨタエンタプライズ

さとるの部屋　FACEBOOK

２０２４年を振り返って／今後の抱負

　議員任期の中間にあたる10月、裾野市議会の議長を拝命しました。同僚からのアドバイスは「役割を果たすことに徹すること」。その通りです。
　「議会」は、独特な雰囲気を持つ場です。議会はまさに「多様性の塊」。意見や考え方の違いを認識し、それらを調整して着地点を見出していくことが、議長としての重要な「役割」であると感じています。
　一方で、別の視点も大切です。人は自分の信じることが「正しい」と思いがちです。しかし、右から、左から、斜め上から、あるいは斜め下から――さまざまな角度で物事を見ることで、「そういう見方もあるのか」と新たな気づきを得られます。遠回りに見えても、多様性の中で全体を俯瞰するためには、斜めからの視点も必要です。
　2025年、次世代へ明るい未来のバトンを渡せるよう、責任を全うしてまいります！

さとるの考え）新東名SIC、道の駅構想など
一方で「財政非常事態宣言」どうするんだ？

　議員1期目、2期目を通じて会派要望として進めてきた「道の駅」や「新東名」など、まちの賑わいや将来への投資となる施策が、2024年に大きく動き出しました。

新東名SIC（スマートインターチェンジ）

　SIC建設の適地調査を進める中で、国やNEXCOと協議を行うためには、投資対効果を50年といった長期間で検証し、十分な材料を整えることが必要です。国やNEXCOが「投資する価値がある」と判断して初めて「事業認可」が下り、国の直轄事業として次の段階へ進むことができます。
　しかし、このプロセスを進めるには険しい道のりが待ち受けており、場合によっては10年以上の長い期間が必要となる可能性もあります。
　ただし、現在の東名裾野ICが、裾野市政50年の歴史において産業立地を軸とした発展の基盤を築いたことは間違いありません。同様に、未来の50年に必要な裾野市のインフラ――それが「新東名SIC」だと考えます。

道の駅

　全国的に注目を集めている「道の駅」ですが、「地産」という観点では、裾野市の農産物などの環境は現状では脆弱といえます。そこで、全国からの交流人口に加え、裾野市を目的に訪れる「関係人口」の強化を図るために、地産の範囲を伊豆や山梨など近隣地域にまで広げることも検討すべきです。
　例えば、御殿場市のアウトレットモールでは、山盛り海鮮丼を提供する飲食店が人気を集めています。このように、地産を狭く定義するのではなく、「東京と大阪の間」に位置する立地を活かし、移動中のビジターの購買意欲を刺激する工夫が重要です。
　交流人口の増加は、裾野市とつながりを持つ「関係人口」の拡大につながり、最終的には地域の活性化に直結します。
　未来の裾野市への投資――真剣に取り組んでいきます！

震災など災害への備えについて考える

2024年元旦に発生した能登半島地震、そして9月の豪雨により、現在も体育館などの避難所で生活を続ける方々がいます。また、災害ボランティアによる復旧作業が引き続き必要とされている状況です。

右の写真は、消防団や地域防災を担う方々による「防災のつどい」に市議会として参加した際の一場面です。地図を舞台上に広げ、災害発生エリアや、災害を引き起こす断層・プレートの規模感を体感しました。

能登半島で発生した地震に関連する断層の幅は「手のひら2つ分」とされます。一方で、東南海地震の影響エリアは「両腕を広げた幅」となり、その規模の桁違いの大きさを改めて実感しました。

防災においては「自助→共助→公助」が基本とされています。まずは「自分と家族の命を自分で守る」を基礎とし、ご家族やパートナーと防災対策について話し合う機会を持ってみてはいかがでしょうか。

地域愛を育て、地域のつながりを実感するために

毎年春と秋には、世界文化遺産「須山浅間神社」の例大祭が盛大に挙行されます。私は市議会議員になる前、龍笛や篳篥（ひちりき）を演奏する楽士として保存会で活動していました。

須山地区の出身ではありませんが、しゃぎりなど地域で受け継がれる伝統や慣習がとても好きで、これまで共に活動してきました。

須山地区は人口約2,300人の小さな集落で、高齢化率は35%。小中学校は単学級で、学年あたり20人ほど。さらに来年度の幼稚園入園予定者が0人という状況からも、少子化が深刻であることがわかります。

いわゆる「過疎化が進む集落地域」ですが、この地域の良さを伸ばすためには何が必要かを考える機会が増えています。幸い、クルマで裾野市や御殿場市の中心地まで20分程度でアクセスできるため、運転が可能なうちは大きな不便はありません。

地元の子どもたちの多くは、進学や就職を

機に市外や県外へと出ていきます。その流れを完全に止めることは難しいでしょう。しかし、地域に交流人口を確保すれば、私自身がそうだったように、地域の雰囲気を気に入り移住してくる人も出てくるでしょう。

地域のつながりを実感できる環境を整え、育てていくことこそが、地域愛を育み、この土地を魅力的な場所として生き残らせるための重要な戦略といえます。

（編集後記）

2024年10月以降、裾野市議会議長として公務の機会が増え、外から見るさまざまな視点や多くのご意見を頂きました。「知らない間に、思った以上に、影響を与えている」と実感することが多かったです。

「まち一番」として求められる所作が何かを肝に銘じて活動します。皆さまの声もお聞かせください。